新長崎学研究センター紀要　第２号（2022年）
長崎外国語大学

【特集Ⅰ】

解題

青山武雄『基督教根本要義』（改訂第2版:青山書き込み本）について

姫　野　順　一

Commentary

On "The Basic Principles of Christianity" with Description by Takeo Aoyama

HIMENO Junichi

ここで写真版として復刻する書籍、青山武雄著『基督教根本要義』は、長崎外国語大学の創設者青山武雄先生（1906-1974）が昭和10年7月20日に発行した、同書訂正第二版（同年12月18日発行）の、自筆書込み本（以下「改訂第2版：青山書き込み本」と記す）である。

１，初版出版の背景

青山先生は、昭和4（1929）年同志社大学専門部神学課卒業後日本組合基督教会松山教会及び郡中教会の伝道師に任職し、松山で愛媛県令が出した宗教団体を監視・規制する県令94号「神仏道外の宗教に関する規則」の撤廃運動を主導した2年の活動後、昭和6（1931）年4月に、神戸の日本組合基督教会平野教会の主任伝道師となって赴任した[1]。時代は軍部のクーデターである5月の5.15事件に続き、9月18日に満州事変が勃発し、15年戦争の発端にあった。

青山先生は、昭和9年に日本組合教会総会で会長の西尾幸太郎牧師から按手礼をうけ、正教師（牧師）となり、教会の運営・司牧に従事し、幼稚園（神戸平野教会付属平野愛児園：現在の石井幼稚園)、日曜学校、青年会、婦人会などを組織して活動した。

青年時代の平野教会員と青山家の家族（中央で長男愷を抱くのが青山武雄先生）

このころの青山先生を指導したのは、多聞教会牧師の今泉真幸氏（日本組合基督教会総会議長、日本聖書教会理事長）である。青山先生のご子息青山愷氏は、青山牧師はこのとき神戸YMCAとかかわりを持ち、奉仕をなし、この経験が戦後長崎YMCAの設立および長崎外国語短期大学の創立につながったと指摘している。

青山先生は平野教会の機関誌として月報『平野の光』[2]（第一号昭和6年10月1日：最終第59号昭和12年6月20日）を発行した。先生はこの月報でキリスト教の教えを解説し、時事問題を取り上げるとともに、バルトやプルトマンのなどの当時先端の弁証法神学を紹介している。聖書を読み込むとともに聖日礼拝で説教を重ね、求道者たる牧師が語るキリスト教の根本問題を簡潔に解説するテキストの必要を感じていた。『平野の光』等には「根本要義」の各論を事前に書き続けている。第6〜9章については、『平野の光』の中で以下の論稿が確認される。

「聖書問答」（第6章部分）『平野の光』第41号　昭和10年3月1日
「祈祷問答」（第7章部分）『同』第４２号　昭和10年4月1日
「教会問答」（第9章部分）『同』第43号　昭和10年5月1日
「神の国と永生」（第6章部分）『同』第44号　昭和10年6月1日

第8章となる「如何に祈るべき乎」は、『同』第20号（昭和8年2月1日）に投稿されている。『平野の光』には、ほかに「感情の宗教化」（第24号昭和8年10月1日）、「シュライエルマッヘル」[3]（第29号昭和9年3月1日）、「充実（含教会員家族写真）」（第16号昭和8年2月1日）といった興味深いプロテスタントキリスト教の洞察に絡む論稿が含まれる。

こうして断片的に書き継がれたキリスト教根本要義の各論は、昭和10年7月20日に平野の光社（神戸市港区石井町3丁目43）から、44ページの活版印刷の単行本と

（右）青山武雄『基督教根本要義』初版　　（左）同改訂２版

して発行された。印刷は佃商店印刷所（佃忠三郎：神戸市港区五宮町17）である。サイズは15.2×11.0cmの小型本で、目次１ページ、使徒信教１ページ、本編３～44ページ、奥付１ページの構成となっている。本編は一の神から九の教会まで編別を区別せずに展開されているが、目次では本編９章を信仰篇（一神、二イエスキリスト、三聖霊）、教拯篇（四罪、五救い、六神の国と永生）、霊交篇（七聖書、八祈祷、九教会）の三部構成にまとめている。

２，改訂第２版の概要

改訂第２版は18.3×12.3cmで、初版よりサイズが少し大きい。表紙も化粧紙が使われている。内容は、使徒信教のあとに「主の祈り」１ページが追加され、各ページは10行から11行に増やされ、ページの字数を増やして総ページ数は43ページに抑えられている。発行所は平野の光社から聖教社（神戸市葺合区生田町1-27：発行者樫田二郎）に変わり、活版印刷所も、中外印刷株式会社（佐藤為吉）に移された。あらたに福音舎（神戸区元町通2-190）が発売所として加わっている。教会における求道者用のテキストとして広く受け入れられたため、体制を整えて改訂して増刷したものと思われる。簡易で、本格的なキリスト教根本問題の解説書は広く流布したと思われるが、発行部数は不明である。

第二版における字句の訂正・補正以外の、大きな改定追補は以下の７カ所である。

１，３ページ７～９行目　改訂　神と我々（人）の違いの強調
「(○問　創造主なる神とは何か)・・・このことは神が我々とは全く異なり。道徳的にもその他の点においても人間と大いなる距離あることを教えるものであります。故にいくら聖人、偉人でも神になることは絶対に出来ませぬ。又擬人的に神を考えることも不可ませぬ。」

２，４ページ2-5行目　改訂 「創造主」から「摂理」を強調
「(摂理とは）神の御意志のなきところには一毛も地に落ちぬことを意味する」

３，８ページ5-6行目 「啓示」の補正
「神が直接御自身を顕し給ふ迄、神を知る能力がありませぬ。神の自己を顕し給ふことを啓示と申します。」

４，８ページ　10行目　受肉の補正 「神の独児なるキリストが肉の形」

５，11ページ　10行～12ページ11行目　キリスト信仰の補正 「(キリストを信ずるとは）彼が我々の信仰の対象となり、神となり、贖主となることであります。この時、我々はキリストの中に生かされ、(一つとなり、）大いなる感激を以て（十字架を負い、キリストの）御跡を辿ることが出来るのであります。○問　何故キリストのみを信ずるか　○答　世には偉人、天才、聖人と称するものが多くあるが、キリストとは少なくとも三つの点において異なっております。即ち（一）偉人、偉人とは自己を遺憾なく発揮した人であるが、キリストは神の意志を成さん為に心を用いられた。(二）世の偉人、聖人は要するに程度の差であるが、キリストを仰ぐ時我々は全く異なった感情を持つ。(三）我々は偉人、聖人に接するとき自己の弱さを感じて失望するが、キリストに接する時益々憧れ、これに近づかんことをもとめるものであります。」

６，14ページ６行～15ページ８行目　聖霊と霊感、直観、神秘的経験との違いの補正
「又霊感や直観は多くの場合断片的でありますが、聖霊の経験は永続的であります。尚聖霊は所謂神秘的経験とも違います。神秘的経験は道徳を踏みにじり、ものをあいまいにぼかして了ひますが、聖霊は益々ものを明確に、事実へと導きます。即ち御霊の果は愛、喜悦、平和、寛容、仁慈、善良、恵信、柔和、節制の如き徳を立つるものであります。(○約束の御霊とは何か　○答）私共の信ずる聖霊とは普通に云う神の霊とは異なり、約束の御霊と称し、キリストの死後。お約

束に依り、信ずるものに與へてくれるものです。・・・これはキリストの教を思い起こさしめ、人類をして次第にそれを理解に導く霊であります。」

７，26ページ　1行～27ページ5行目　神の国の補正

「（○　神の国（天国とも云う）は）第一にこの世とは全く異ひます。この世は神を軽蔑してまで自己を愛せんとしますが、神の国は自己を軽蔑してまでも神を愛せんとするものであります。又この世の終りは死であり、滅びでありますが、神の国は永遠不滅であり、限りなき祝福であります。一言にして云えば神の国とは神の意志が絶対的に支配するところを謂い、（人間が進んで神の支配に服従し、己を捧げるところに存在するものであります。）故に基督教の目標は神の国の建立にあり、従って私共が救われると云うことも神の国の実現の一段階であります。・・・（○　神の国はいつどこに実現するか　○答　・・・）しかも未来的なものであり乍ら信仰ある人は現在これを味わうことが出来ます。」

＊（　　）内は初版の章句

３，「改訂第２版：青山書き込み本」の概要

ここで以下復刻する原本は、青山武雄著『基督教根本要義』改訂第二版の、青山先生による手拓書き入れ本である。本文は改訂第二版と同じであるが、奥付と裏表紙が剥落し、表紙には青山による「牧師用」の記入がある。この手拓書き入れ本の２ページから３ページの間の余白に書き入れられた、青山先生による本書の基本的構成の見取図は、『新長崎学研究センター紀要』第１号の拙稿「『年譜　青山武雄』の掲載に寄せて」で解説した[4]。ここでは絵解きの解説を省き、原書の各ページを写真版で復刻し、本編に青山先生がペンまたは鉛筆で書き入れた挿入部分を解読して添付する。

青山先生は、各章句の聖書の出典を本文横に詳しく追補記入している。大きな書入れ章句の聖書出典は解読文に聖書名を追記したが、本文に付された聖書の出典のみの記述は、省略している。その部分ついては、以下の聖書の略記号を参考に、写真版から出典聖書の箇所を確認していただきたい。手書きの文字は読みにくいものもあるが、青山先生による出典聖書の略語は以下のとおりである。

		青山略語
出エジプト記	Exodus	Ex
サムエル記　第一	1 Samuel	1 Sam
ネヘミヤ記	Nehemiah	Heh

エステル記	Esther	Eths
ヨブ記	Job	Job
詩篇	Psalms	詩
イザヤ書	Isaiah	Isa
エレミア書	Jeremiah	Jere
マタイの福音書	Matthew	Matt
ルカの福音書	Luke	L
ヨハネの福音書	John	John
使徒の働き	Acts	Acts
ローマ人への手紙	Romans	Roma
コリント人への手紙　第一	1 Corinthians	1 Cor
コリント人への手紙　第二	2 Corinthians	2 Cor
エペソ人への手紙	Ephesians	Eph
ピロピリ人への手紙	Philippians	Phil
テサロニケ人への手紙　第一	1 Thessalonians	1 Thess
テサロニケ人への手紙　第二	2 Thessalonians	2 Thess
テモアへの手紙　第一	1 Timothy	1 Tim
テトスへの手紙	Titus	Titus
ヘブライ人への手紙	Hebrews	Heb
ヤコブの手紙	James	Jame
ヨハネの手紙　第一	1 John	1 John
ヨハネの手紙　第二	2 John	2 John
ユダの手紙	Jude	Jude

４,「改訂第２版：青山書き込み本」の意義

青山先生の改訂２版への書き込みは第３版の準備のためだったと思われる。「書き込み版」に加えられた章句の訂正や、解説の追記、各章句に附された聖書出典の注記は詳細かつ丁寧である。

この「書き込み本」の意義は、第一にキリスト教に関する根本要義の各章句に、聖書の出典を追記していることである。この出典は、青山先生が同志社大学神学部の卒業論文で取り上げた共観福音書（マタイ、ルカ、マルコ、ヨハネの福音書）および使徒列伝が中心である[5]。しかしなぜかマルコの福音書への言及はない。ほかの聖書の出典箇所については、本復刻版のそれぞれの箇所の出典略号（例：John1-5「ヨハネの福音書」第１章５節）を、上記３の対照表で参照していただきたい。第二の意義は、

西行法師、本居宣長、吉田松陰、あるいはクロロホルムの発明者シンプソンなど、キリスト者でない人物を取り上げて、信仰の例示としていることである。これは、このテキストを利用する求道者・牧師の説教の便宜のためと思われる。また第三に、利己心を説く荀子、ルソー、ホッブス、唯物論が言及される。しかしそれらは不十分とみなされ、道徳とは区別される本覚の変形としての精神作用が解説される。第四に、その場合罪を犯す人と神が対比され、聖霊の媒介で、福音に導かれた愛による救済・贖罪が論理的に説明される。第五に、聖書の成り立ちが説明される。当時の研究水準を反映して、バチカン写本やシナイ写本が源流とされているが、戦後の発見となる死海文書は当然未知である。

以上のような青山先生のキリスト教の根本要義の解説は、神人関係における不可逆（神が先または上で人が下または後）・不可同（神と人は同じではない）・不可分（神と人は分離できない）の根本を、簡潔に概説する内容となっていることに気付かされる。その背後にはバルトやシュライエルマッハといった、同時代のプロテスタント神学者の弁証法神学の影響が認められるが、その継承関係の解明は今後に残された課題である。

注

[1] 青山先生の生涯の年譜については青山愷「年譜　青山武雄」『新長崎学研究センター紀要』長崎外国語大学2022年19～57ページ参照

[2] 平野教会の機関誌『平野の光』は、欠番があるものの、第1号から最終号の第59号まで青山家に保存されていた原本を参照することができた。

[3] 佐藤 優・深井 智朗『近代神学の誕生：シュライアマハー「宗教について」を読む』幻冬社2019年は最近のシュライエルマハー研究をフォローしている。

[4] 姫野順一「「年譜　青山武雄」の掲載に寄せて」『新長崎学研究センター紀要』長崎外国語大学第1号参照

[5] 同『同』第4節15~17ページ参照